

わが国の精神病学にたいする来日外人医学教師の貢献

岡田靖雄

精神病学専任の教授が誕生するまで各地の医科大学、医学校で精神病学を教授していたのは、主として内科学担当の教授であった。わが国で最初の精神病学専任の教授は、一八八六年にドイツ留学から帰国した榊^{さかき}傲^{あき}である。明治初期の精神病学教育においては、外人教師のはたした役割はかなりおおきなものであった。

わが国で最初に認可された精神科病院は、一八七五年設立の京都癲狂院である。ここには、一八七二年から療病院教師をしていたヨンケル・フォン・ランゲックの説をいれて、エラスチカゴムで四壁をおおった護居室があった。癲狂院の設計・運営については、このほかにもヨンケルの示唆があったことだろう。

一八七五年から警視医学校でヴィルヘルム・デーニツが講義した「断訟医学」には精神障碍の篇があった（単行本としては一八七九年）。これはヨーロッパの精神病学体系にもとづく最初の講義で、疾患分類体系からすると、その内容はヴィルヘルム・グリージンゲルによっているのだろう。

一八七七〜八二年に京都府療病院で内科学を担当したハインリヒ・シヨイベは、『ディー・クランクハイテン・デア・ヴァルメン・レンデル』（一八九六年初版）に、狸神憑き・犬神憑きを、迷信にもとづく暗示による疾患として記載している。かれが引用している症例は、一八七九年の『東京医事新誌』に江澤圭磨がよせたものである。シヨイベが在日中に精神疾患患者を直接みた記録をみだしていないが、当然そういう患者にもふれていただろう。シヨイベの師カール・ヴ

ンデルリヒはグリーンゼルの親友であったことからすると、かれの精神病学はグリーンゼルによっていただろう。

一八七六年から東京医学校で内科学などの教師をしていたエルヴィン・ベルツは、一八七九年夏学期から内科学の一部分として精神病学を講義した。一八八二年から学科課程に精神病学がはいったが、これもベルツが担任した。一八八五年には狐憑きについてくわしく記述した。榊の論述に、ベルツが精神病学臨床講義をしていたともとれる文章があるが、すこしくあいまいである。また一八八四年には、東京府癲狂院で死亡した、てんかん患者および進行麻痺患者を済生学舎で解剖している（東京府癲狂院関係資料ではこれについての記載はなかったが、『中外医事新報』に報じられている）。進行麻痺例は、わが国で確認された進行麻痺の第一例といつてよいか。ベルツの精神病学がグリーンゼルによっていたことは、「狐憑き研究史—明治時代を中心に—」（『日本医史学雑誌』第二十九卷第四号）ですでにのべた。小池正直が前記江澤氏症例をベルツに話したところ、グリーンゼルの教科書をみせられた。また吳秀三が高橋順太郎筆記にもとづき、ベルツが講義した精神病学の分類体系を紹介しているが、それはグリーンゼルの体系なのである。

アルブレヒト・フォン・ローレッツが一八七九—八〇年に愛知県公立医学校で行った「断訟医学」講義中では、裁判上精神学がかなりの比重を占めていた。ローレッツは参考文献として、クラフトエビング『裁判精神病理学』（一八七七年）などをあげている。だが、ローレッツがあげる精神疾患分類はもっと古い形のように、だれの学説によっているか、まだ確かめることができていない。一八八〇年に愛知県公立病院に癲狂病室ができた。このための県知事への建議は、一八七五年の京都癲狂院設立趣意書および一八七九年の東京府の癲狂院費予算説明と比べると、もっとも格調高い文章である。それは、癲狂者の裁判法、癲狂者律の必要性をといっていること、癲狂者の療法として「有名ナル『コノリー』氏が『ノオーン・レストレイン・システム』（非拘束制）を強調していること、県下癲狂人調査を要望していることが、注目される。このあと移った山形県済生館でも、かれは癲狂室の改築を要望している。ローレッツの精神病学への関心はなみなみならぬものだったのである。

このように、外人教師がわが国の精神病学に残したものは散在的ではあったが、それらが本格的な精神病学建立の礎石となったのである。

(精神科医療史研究会)